様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９５２

研究課題名（和文）村落耕地の極微細地名における地域差および集落差とその自然的・社会的条件

研究課題名（英文）Folk agricultural plot names and physical-social conditions in Japanese vilages

研究代表者
今里　悟之（IMAZATO, Satoshi）

九州大学・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：９０３２４７３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の村落空間における極小スケールの微細地名である、田畑一枚ごとの名称の実態を明らかにし、命名のパターンや一般的傾向を見出した。あわせて、そのようなパターンや傾向について、地域間の差異、集落間の差異、集落内部の世帯間の差異などを分析し、その差異を生み出す自然的・社会的条件について考察した。事例集落は長崎県平戸市の諸集落であり、比較の対象として滋賀県野洲市の3つの集落にも言及した。

研究成果の概要（英文）：Although some geographers, folklorists, and social linguists have studied minor place names within Japanese rural villages, few have focused on the individual plot names of the areas characterized by rice paddies and dry fields surrounded by ridges. These plot names, which account for the smallest unit of place names within a Japanese village, are mainly used within a single household. This study showed the key findings on the naming methods of such folk plot names, based on case studies of Japanese villages in Shiga and Nagasaki Prefectures. It argued that the villagers name each plot using four cognitive linguistic methods: simplified attributes, part-whole relationships, spatial adjacency, and temporal adjacency. Based on the physical conditions, the frequencies of using such principles differ among villages. In addition, this study examined social and historical conditions as contexts of such naming methods of the case-study villages.

研究分野：人文地理学

キーワード：小地名　村落空間　空間認知　認知言語学　文化的景観　宗教分布　社会構造

１．研究開始当初の背景

日本の村落における微細地名の研究は、従来、地理学・社会言語学・民俗学などにおいて、小字をはじめとする「小地名」を対象として進められてきた。小地名は、村落における最小単位の地名として扱われ、住民の空間認知が反映されたものとして、分布パターンの集落間での差異や、認知量の個人差などが解明されてきた。

ところが、実際の村落には、小地名よりもさらにスケールの小さな地名が存在する。それが、各農家の世帯内でのみ通用する、田畑の１枚単位の呼び名である。研究代表者は、この非公式的な呼び名を「筆名」（ふでな）という学術的概念として提示し、その名称が指し示す具体的な範域（地割や地番との対応関係）や命名の原理について探究してきた。

２．研究の目的

研究代表者がこれまで行ってきた筆名の研究は、滋賀県の平地農村など、限られた条件の数世帯のみを事例としたにすぎず、提示を試みた命名の一般原理についても、仮説段階に止まる。そのため、自然的・社会的な諸条件がさまざまに異なる地域や集落を新たに対象にしながら、より多くの世帯を調査することが必要となる。このような基礎作業は、微細地名に関する理論的考察の進展に不可欠であると考えられる。

本研究では、村落空間における極小スケールの地名である筆名の実態をより詳細に分析し、異なる地域間の差異、同一地域内の集落間の差異、同一集落内の世帯間の差異を生み出す、自然的・社会的条件を明らかにすること目的とした。

３．研究の方法

本研究では、長崎県平戸市の平戸島全域を対象とした。特に詳細な調査を行ったのは、中部東岸地域の宝亀町・木場町、中部西岸地域の春日町・高越町・根獅子町、南部地域の大志々伎町の諸集落である。主な研究方法は、地元住民の方々への聞き取り、景観や祭礼などの観察、区有文書（各集落で保管された記録文書類）および既存文献の分析である。研究の一部には、多変量解析も併用した。

４．研究成果

（１）まず、研究代表者がこれまで提示してきた、筆名に関する４つの命名原理（a 簡略的属性、b 部分全体関係、c 空間的隣接、d 時間的隣接）の出現頻度が平地農村とは異なる点、同一の集落内でも命名原理に大きな世帯差が見られる点、時に複数の命名原理による筆名が存在する点、小字名の転用以外の方法でも情報量が節減されている点、などが明らかになった。なお、上記の４つの命名原理についてそれぞれ説明すると、a の「簡略的属性」とはその地筆の属性の一部を簡略化したもの、b の「部分全体関係」とは地筆が包含される全体の名称あるいはその中での相対位置に基づくもの、c の「空間的隣接」とは付近に存在する顕著な景観要素（地物）に基づくもの、d の「時間的隣接」とは直近の過去の事物に基づくものである。

さらに、認知言語学におけるアフォーダンス、プロトタイプ、ランドマークとトラジェクター、ベースとプロファイルの諸概念が、上述の命名原理の一部を理論的に説明し得ることが見出された。以下、順番に説明すると、まず「アフォーダンス」とは、環境の中に実在する知覚者にとって価値のある情報を指し、筆名の場合、面積、形状、地質、土地利用など、その地筆の多数の属性のうち、耕作者自身が最も重要と判断した属性のことである。また、「プロトタイプ」（理念的な典型）に基づく筆名として、大きい田を表す「大畝町」、小さい田を表す「小畝町」、円形に近い耕地を指す「円畝町」や「円畑」、細長い田を表す「長畝町」などを挙げ得る。以上は先述の a の「簡略的属性」の命名原理に関わる概念である。さらに、「大畝町」と「大畝町の上」という関係のように、参照点となる地割である「ランドマーク」（大畝町）とそれに基づいて命名された地割である「トラジェクター」（大畝町の上）との関係として捉え得る筆名も存在する。これは、a の「簡略的属性」と c の「空間的隣接」という双方の命名原理に関わる。このほか、「櫨の木田」の命名の元になった櫨の樹木のように、「ベース」（地）としての全体の景観の中で「プロファイル」（図）として際立って認知されている景観要素が存在する。これは c の「空間的隣接」の命名原理に関わるものである（以上が発表論文⑤）。

さらに、平地農村である滋賀県野洲市の事例（研究代表者による先行研究）と比較した場合、以下の表で示す通り、４つの命名原理の頻度に大きな差異があることが判明した。

事例集落	命名原理			
	a	b	c	d
滋賀県野洲市				
小南集落	9	6	7	2
冨波甲集落	1	5	0	2
木部集落	0	6	0	0
長崎県平戸市				
宝亀集落	29	36	20	7
木場集落	22	26	15	1

滋賀県野洲市の事例集落では、平野部に位置することから、圃場整備が早くから完了しており、耕地一筆あたりの面積が相対的に大きい。各世帯の耕作地は１つの小字に１枚のみであることが多く、その場合にはしばしば小字名をそのまま筆名に転用しており、それが b の部分全体関係という命名原理が多くなる１つの理由となっていた。

これに対して、長崎県平戸市の事例では、急傾斜地に耕地の多くが位置し、棚田が卓越していることから、耕地 1 枚あたりの面積が小さいものが多い。また、同一世帯の耕地が数枚から 20 数枚単位で隣接している。このため、相対的に多様な原理によって筆名が命名されており、b の部分全体関係の場合も、垂直的な方向性（上下方向）に基づいた命名が非常に多いことが明らかになった（以上が発表論文③）。

（２）さらに、急傾斜地で耕地を経営している世帯にはカトリック戸が多い（先述の長崎県平戸市の事例 8 戸のうち 5 戸がカトリック）という事実を発端として、対象地域の自然的・社会的条件に関するいくつかの研究を行い、以下のような事柄が明らかになった。

まず、在来集落・旧キリシタン集落・カトリック集落の 3 類型を比較する形で、平戸島村落の文化的景観の成立構造を解明した。石垣の築造、田畑の耕作（上述の筆名の命名はここに関連する）、森林の利用などの知識や技術にもとづく生業景観要素は、3 つの類型の集落に共通していた。さらに、それらの知識や技術を基盤とした、墓石の造成、祭祀用植物の利用、森林の聖地化などによって成立した宗教景観要素も、3 つの類型にほぼ共通していた。これらに加えて、在来集落と旧キリシタン集落では、牛神・辻札・堂などの在来要素的な宗教景観要素が豊富に見られた。旧キリシタン集落では、このような在来要素のほか、禁教時代に起源を持つ、殉教伝説地やキリシタン伝説地などの付加要素が見られた。これに対して、復活後のカトリック集落では、それまで維持の一翼を担ってきた在来要素との関係が断たれ、直接関わりを持つ宗教景観要素は、教会という更新要素のみから構成されることになったと考えられる（以上が発表論文④）。

次に、平戸島を含む平戸市全域における集落ごとの宗教分布には、地域ごとに明瞭な特徴があることが判明し、これに基づいて平戸島を 4 つに地域区分することができた。第 1 は北部地域で、主に明治期以降に五島・黒島などからカトリックが移住した結果、半島部の集落や平戸市街周辺にカトリックが広く散在する。この北部地域は、16 世紀後半のキリスト教布教の中心地であった。第 2 は中部西岸地域で、16 世紀後半にキリスト教が伝播し、数百年にわたってキリシタン信仰を組織的に継承してきた集落が連続的に分布する。この地域では、カトリックへの復活戸は極めて限られていた。第 3 は中部東岸地域で、19 世紀後半のキリスト教再布教の影響を最も強く受け、各集落に占めるカトリック戸数の割合が他地域に比べて高い。多くの集落では、江戸期から明治期にかけての島外（外海・大村・黒島・五島など）からの移住戸と、在来（仏教徒）の改宗戸が混在している。特に宝亀町や木場町（先述した筆名研究の事例集落）などでは、カトリック集落が形成されている。第 4 は南部地域で、西岸の一部の集落を例外として、キリシタン戸やカトリック戸はほとんど存在しない。この地域では、キリスト教の影響を全く受けない、平戸島における宗教のより古い形態を残している可能性がある（以上が発表論文①）。

最後に、対象地域のカトリック集落の社会構造をより深く理解するために、宝亀町の一集落における宗教的地位の規定要因について、村落内部における役職のキャリアパターンとの関連に着目しながら明らかにした。対象とした期間は 1930 年から 2009 年までの 80 年間である。教会重職への就任については、全期間を通じて、経済階層や学歴とはほとんど関連していなかった。これに対して、少なくとも第二次大戦以降は、教会重職就任と区会役員就任との間に一定の関連性が見出された。区会役員への就任歴は業績主義的評価（地域社会への貢献に対する評価）の累積の表れと考えられ、教会重職の選出において、業績主義的評価がまず働いていたことが窺える。戸別の就任状況の検討結果に基づく知見としては、教会重職は区会役員のキャリアパスの延長上に位置づけられており、区会役員を含めた個人のキャリアパスは 8 つの類型にパターン化でき、そのうち教会重職に就任し得たものは 3 つの類型のみであったことが明らかになった。すなわち、カトリック集落における宗教的地位の獲得の形態は、少数の一定のパターンに限られるということが判明した（以上が発表論文②）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①今里　悟之、平戸島におけるキリシタンとカトリックの分布と伝播、史淵、査読無、152 号、2015、135―167

②今里　悟之、カトリック村落における宗教的地位とキャリアパターン―長崎県平戸市宝亀町三区を事例として、村落社会研究ジャーナル、査読有、21 巻 1 号、2014、26―36

③IMAZATO、 Satoshi、 Naming methods of folk agricultural plot names in Japanese villages: A connection between geography and cognitive linguistics、 *Semestrale di Studi e Ricerche di Geographia*、 査読無、 Vol.25、 No.2、 2013、 27―39

④今里　悟之、平戸島村落の文化的景観における世界遺産化への可能性、地理学報、査読無、37 号、2013、77―93

⑤今里　悟之、長崎県平戸島における筆名の命名原理と空間単位―認知言語学との接点、地理学評論、査読有、85 巻 2 号、2012、106―126

〔学会発表〕（計２件）

①IMAZATO、 Satoshi、 Naming methods of folk agricultural plot names in

Japanese villages: A connection between geography and cognitive linguistics. IGU Kyoto Regional Conference 2013、 2013 年 8 月 7 日、京都国際会議場（京都府京都市）.

②今里　悟之、空間分類体系の最小単位としての筆名―課題と展望、人文地理学会 2012 年度大会特別研究発表、2012 年 11 月 17 日、立命館大学（京都府京都市）

６．研究組織（計１名）

(1)研究代表者

今里　悟之（IMAZATO、 Satoshi）

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：９０３２４７３０